

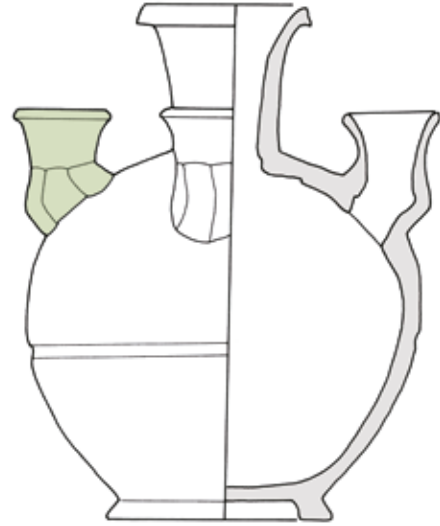
栗栖野の窯跡から二彩陶器が…

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



見つかった二彩陶器 右図の着色部分にあたる。



多口瓶 『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』を改変

平成4年3月、京都洛北の岩倉幡枝町の丘陵地にある栗栖野瓦窯跡の発掘調査で、丘陵の斜面から窯跡を4基発見しました。その窯跡の1基の床面から二彩陶器の破片が見つかりました。

窯の中から二彩陶器が見つかったことは、この窯で二彩陶器が焼かれていたことを意味しています。今まで、窯の中から二彩陶器を含めて多彩釉陶器が見つかったことはなく、今回全国で初めてその窯跡が発掘調査で確認されたことになり、きわめて貴重な発見となりました。

多彩釉陶器

多彩釉陶器とは、鉛を主な原料とした釉薬を使い、緑・黄・白などの色を施したもので、今回の二彩陶器の他に三彩陶器もこの種類

に入ります。

一般に多彩釉陶器といえば、奈良時代に造られた正倉院に伝わる奈良三彩が有名です。この陶器の源流は唐三彩で、7世紀末にこの技法が唐で確立しました。唐では墓に副葬するために生産したとされています。

一方日本では奈良時代にこの施釉技法が遣唐使によってもたらされ、製品は主に仏具・祭祀具などとして使用されました。これらの陶器の生産は、奈良時代に始まり、平安時代初期まで続いたと考えられていました。

多彩釉陶器は正倉院に伝世したもの以外に、発掘調査によっても見つかっています。しかしその量はごく僅かです。出土地を全国的にみると、平城京のあった奈良県

が最も多く、次いで長岡京、平安京の営まれた京都府で、主に畿内とその周辺地です。ちなみに当研究所が15年間に行なった調査で出土した遺物総数は整理箱にして7万箱余りで、そのうち多彩釉陶器は60片余りと、1箱にも満たない量です。このことから時期を限ってごく少量生産された特殊な焼き物であることがわかります。

見つかった二彩陶器片

今回見つかった二彩陶器は、「多口瓶」と呼ばれる壺の小さな破片です。多口瓶とは、壺の肩の部分に複数の小さい壺状の口が付いたもので仏具として使用されていました。破片はその小さい壺状の口の部分で、大きさは5.5cm、口の直径は3cmです。壺状の口の周りには、光沢のある白と緑の釉薬が

縞状に施され、鮮やかに残っています。このような美しいものが栗栖野の地で焼かれていたわけです。

栗栖野瓦窯跡

栗栖野瓦窯跡は、昭和5年(1930)に木村捷三郎氏によって発見されました。氏はこの窯跡が『延喜式』に記載されている「栗栖野の瓦屋」であり、国家の直営する官窯と位置付けました。そのことが契機となり、昭和9年(1934)には丘陵の一部が国の史跡に指定されました。その後、今回を含め6回の調査が実施され、確認した窯は24基になります。

この瓦窯跡は、当初平安時代の瓦窯とされていました。しかし、調査によって瓦の他に須恵器・緑釉陶器なども焼いていたことや、時代も飛鳥時代までさかのぼることがわかりました。

二彩陶器の見つかった窯跡

二彩陶器の見つかった窯は、平安時代初期に使用されていたものです。その構造は、丘陵の斜面を斜めに掘り込んで窯の下半部を造り、天井部をスサ入り粘土でカマボコ状に覆う形態で、半地下式と呼ばれるものです。窯の全長は4.8m、最大幅1.7mで、内部の構造は、斜面の下の方から燃料を焚く燃焼部、焼くために製品を並べる焼成部、そして煙を排出する煙道部からなります。

この窯には上下ふたつの床面があることがわかりました。つまりこの窯は一度床の貼り直しを行っていたわけです。上の床面からは、焼き損じた多くの須恵器の皿・緑釉陶器の壺など、最後に窯が使われた時の焼き物が見つかりました。下の床面では、焼成部に

のし
熨斗瓦(屋根の棟に使用する瓦)を敷きつめています。これはこの窯の大きな特徴です。この面からは、焼き台(製品を乗せる台)に転用した瓦・トチン類が多く見つかっています。そして、二彩陶器の多口瓶の破片もこの面の燃焼部から見つかりました。

発見の意義

今回の発掘調査における二彩陶器を焼いた窯跡の発見の意義は、まず現時点で多彩釉陶器が平安時代初期まで生産されたことが明確になったことです。

つぎに従来、多彩釉陶器は平城京周辺地だけで生産されていたと考えられていたのが、京都で発見されたことで、多彩釉陶器の生産地について見直しが必要となったことです。

(本 弥八郎・吉本健吾)



二彩陶器のみつかった窯跡とその実測図 ●は三又トチン、▲は二彩陶器片の出土地点。